教職課程センター紀要　第１号　169－170ページ，2016年12月
Jour. Center Teacher Develop. Edu. Res., Daito Bunka Univ., No.1 169－170, Dec. 2016

実践報告

歴史教育の方法に関する一考察―教えることの難しさ

A study on Difficulties in History Education

村井　信幸

Nobuyuki MURAI

Key words：

昨年度「教科教育法」（「地理歴史」）の「歴史」を担当した。「歴史」の授業は後期に行い，22名の学生が履修した。成績は各自に課した模擬授業と学年末に提出させたレポート（「歴史とは何か」）とをあわせて評価した。模擬事業は例年極端な場合を除いて，あまり差がでないものであるが，本年はレポートの課題「歴史とは何か」とどのようにつながるかを評価することにした。

受講者のほとんどが，人前で話すことは初めてであるので，前もって教材研究を徹底するように指示した。各時限に２名が授業を担当し，各自30分授業を行い，その内容に関して受講者全員の参加のもとで10分間討論を行うものであった。

模擬授業には，効率よく進めるために，授業内容を記したプリントを配布するように指示した。数年前，本人の見解でプリントを配布せず，板書のみで授業を行った者が１名だけいた。これは大失敗で，本人の予定した内容の半分も説明できなかったことを現在の受講生に厳しく指摘した。

模擬授業は「歴史」という分野において，各自の興味に基づいて，テーマは自由に選択させた。初めて人前で話す場合には，自分の興味ある問題を選択させた方が効果的であると考えた。各自が選んだテーマはやはり日本史が圧倒的に多く，特に鎌倉時代から江戸時代のものが多かった。

受講者を学年別に見ると，三年生が圧倒的に多い。翌年の教育実習へのよい準備となったが，初めて人前で話すということが各自の大きなプレッシャーとなったようであった。彼らの模擬授業を終えての感想はまず時間配分が上手くいかなかったことがあげられた。これは教材研究の不足からくるものである。あせるとどうしても早口になり，極端な場合は自分自身の言っていることが理解できなくなる。当初の予定より授業が進まなかったという例が非常に多く見られた。最も残念に思われたのは「大日本帝国憲法」についての授業であった。おそらく担当した学生は，「民主主義の大切さ」を訴えたかったのだろう。しかし，この憲法で述べられた「天皇の陸海軍への統帥権」に詳しくふれることなく終了してしまった。つまりこれが原因で旧日本陸海軍は，天皇の命令にのみ従えばよいのであり，議会，内閣を無視することになる。この結果日本は軍国主義の道を進み，第二次世界大戦に突入することになるのである。この問題にふれることができなかった。「民主主義の大切さ」を訴えたくて，緻密な教材研究をしてきた本人にとっては非常に残念なことであったろう。「時間配分」という問題はこのように残念な結果をもたらすのである。

歴史の授業が生徒にとって魅力がないのは「暗記」中心の詰込み授業であるからだといわれる。この場合最も欠落してしまうのが「感情」であると著名な歴史学者ホイジンガは述べている。歴史の授業にいかにして感情というものを導入していくかということについては，徹底的な教材研究なしには考えられないのである。このような状況でも１名だけ「楫取素彦」というあまり知られていない人物について扱った学生がいた。楫取素彦は吉田松陰のもとで学び，初代群馬県令となり，生糸，教育で

群馬県を大きく発展させた。このようなあまり有名でない人物について，人物像を描き出し，その感情を再現した例も見られた。

また一般的な講義形式の授業では，教員の一方的なものになってしまい生徒不参加となってしまうことが多い。担当者の多くはどのようにして生徒（他の受講者）を授業に参加させられるか悩んだようである。彼らなりに工夫して何とか生徒に発言させようとしていた。授業を中断して話し合い，討論をさせていた。プリントを配り，問題を解かせるという例もあったが，括弧入れの問題形式から生徒の参加を導き出すということは結構難しかったようである。

生徒の理解を深めるためには，「視覚的工夫」は不可欠なものである。毎年何人かの者がビデオを使用しているが，本年は唯一人，「縄文時代」を扱った学生のみであった。自分なりに工夫して縄文時代の遺跡をビデオから解説し，「縄文時代人の心」を紹介していた。またプリントの図から考えさせるという方法を取った者もいた。「日露戦争」を扱い，日本人，ロシア人，中国人の風刺画を見せて，それぞれの国の戦争時の計画，意図を説明した。あと一歩の工夫があれば，素晴らしい授業になったと思われる。

なお模擬授業においては，30分の講義の後「生徒」となった他の学生との討論を10分行った。板書，声の出し方等活発な意見が出たが，何故か一番肝心な授業内容については，つっこんだ意見が不足していたように思われた。やはり遠慮してしまったのだろうか。学生には「他者の意見は神のおつげ」と思って聞いてほしいと何度も言っている。他人の授業を見て何を改善するかを考えたという者が多くいる。授業内容についてもさらにつっこんだ討論をしてほしかった。

最後にレポートの課題とした「歴史とは何か」という問題である。周知の如く，歴史とは諸事件の原因の研究から始まるものである。歴史を学ぶことには，過去の出来事を過去のみで終わらせずに，どのように現在生かすということが必要不可欠な問題なのである。このことを中心に考えて徹底的に教材研究を行うことによって生徒の理解を深め，彼らが積極的に参加する授業が可能になる。「教えることは学ぶことのはじめ」というが，「教えることの難しさ」を知り，歴史を通じてこれからの人生の生き方を学ぶということを学生諸君は考えてほしい。